「腐女子」研究における欲望の認識に関する一考察

――女性のセクシュアリティという視点から――

広島市立大学大学院国際学研究科博士後期課程　相田美穂

1　目的

この報告の目的は，現在では世界語ともなっているサブカルチャーである「少年愛」「やおい」「ボーイズ・ラブ」（ＢＬ）や，その愛好者としての「腐女子」に関する研究において読み込まれている欲望について，ジェンダーの観点からなされている位置づけを整理し，これまでの「少年愛」「やおい」「ＢＬ」研究が省みなかったことが何であるのかを明らかにすることを試みることである。

2　方法

そこでデータとして，近年の「少年愛」「やおい」「ＢＬ」や，その愛好者である「腐女子」を対象とした研究を参照し，研究が焦点化してきた主題を再検討する。

3　結果

分析の結果，研究が焦点化してきた主題とは，石田美紀（2007）の表現を借りれば，「どうしてそんなものがそんなに好きなのか（略）なぜ私はこれがこんなに好きなのか」という問いに象徴されていることが指摘できる。敷衍すれば，研究の焦点は，「女性でありながら，なぜ男性同士の恋愛や性を描いた作品が好きなのか」という問いに対する解答として構成されているということだ。

その根拠となる近年の研究として，「男性同士の恋愛や性を描いた作品」という意味での「やおい」漫画を，女性向けポルノグラフィ漫画のジャンルの一つとして位置づける堀あきこ（2009）や，守如子（2010）らの研究がある。また，東園子（2010）は，愛好者が「やおい」を消費することを「萌え」として捉え，「やおい」の「萌え」は，東浩紀（2001）の提示した「データベース消費」では説明できない「関係性消費」であり，「やおい」での「萌え」は，男性おたくのものとは異なる女性の「萌え」であると論じている。

堀，守，東らの研究では，「やおい」を，第一には女性というジェンダー，第二には，女性の欲望の問題として認識しているといえる。

4　結論

以上から，近年の「少年愛」「やおい」「ＢＬ」，「腐女子」に関する研究は，「やおい」や「腐女子」をジェンダーの観点からポルノグラフィや萌えという言葉で説明される女性の欲望として認識し，女性のセクシュアリティの問題として構成していることが指摘できる。これまでの研究には，「なぜそれが好きなのか」を説明することや，「どうしてそんなものが好きなのか」という問いが成立すること自体を問題化する視点は現れていない。この視点は，これまでの研究が省みてこなかったことである。

文献

東浩紀，2001，『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』講談社現代新書.
東園子，2010，「妄想の共同体――「やおい」コミュニティにおける恋愛コードの機能」東浩紀・北田暁大編『思想地図 vol. 5』NHK 出版.
堀あきこ，2009，『欲望のコード――マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店.
石田美紀，2007，「響きと吐息――〈声のＢＬ〉という申し開きのできない快楽について」『ユリイカ』39-16（545）.
守如子，2010，『女はポルノを読む――女性の性欲とフェミニズム』青弓社.